

Poetical Representation of IDEA, study on KANEKO Mitsuharu's Travels in Malay and Dutch East Indies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/598

イデアの詩的形象

— 金子光晴『マレー蘭印紀行』論 —

土屋 忍

本文読解の必要性について

金子光晴の南洋体験^{〔1〕}については多くの人がやや大雑把に言及しているが、遺された南洋文学のテキストが本格的に文学研究の対象とされることはなく、今日に至っている。たとえば最近、中村誠『金子光晴（戦争）と〈生〉の詩学』（笠間書院、二〇〇九・四）と金雪梅『金子光晴の詩法の変遷 その契機と軌跡』（花書院、二〇一一・三）という二冊の金子光晴論が刊行され、どちらも金子光晴の南洋体験については章を割いてその業績を紹介しているが、考察部分は曖昧かつ概説的であり、書かれたものの文学性が詳しく検討されているとはいえない。曖昧さの内実については後述するとして、まずは、

なぜそのようなことが起こるのかについて確認しておくたい。

金子光晴論の大半は人物論である。そしてその金子光晴という人物に関する評論の多くは、既存の年譜と簡単な作品紹介に基づいている。作家の伝記的事項と作品の書誌的事項を調査した信頼すべき年譜としては、『金子光晴全集』第十五卷（中央公論社、一九七七）所収の年譜と『人物書誌体系 金子光晴』（日外アソシエーツ、一九八六）所収の年譜とがあり、どちらも原満三寿の作成である。原による『評伝 金子光晴』（北溟社、二〇〇一）の達成は、そうした一次資料の博搜と分析の所産であった。こうした伝記的研究は、もちろんすぐれた作家研究のひとつであるが、それらに負う余り独自の検証

を経ずにまるごと踏襲した人物評論を作家研究と呼ぶのは難しいように思われる。作品研究の場合には、先行する論文における書誌的情報や作家論的研究、ときにはテクスト評釈を踏まえて少しでもそれらを乗り越えることが目されるのに対して、人物とその生きた時代を論じるときには、従来の作家情報蓄積型の研究を実証的に乗り越えることが研究課題とされていない傾向があるとするならば、あまりに不可思議である。

中村誠の『金子光晴〈戦争〉と〈生〉の詩学』は、以上のような人物論に偏した動向に自覚的であり、そうした方向性をもったこれまでの論考をひきうけて、丁寧に整理しつつ、それらに修正を加えていった好著である。中村によると、『マレー蘭印紀行』や『どくろ杯』等の自伝的三部作をとりあげた論考の「多くは金子のアジア認識や思想形成を探索のテクストとして位置づけられる」が、城殿智行「モダンイズムの反復―金子光晴と「詩人」の回想―」（『日本近代文学』一九九七・一〇）及び土屋忍「金子光晴『マレー蘭印紀行』論序説―紀行文批評のために―」（『国際文化研究』一九九八・十

二）はそれらと「全く異なったアプローチからの論」であるという。ただし、私が今回ふたたび「全く異なったアプローチからの論」を試みるのは、「アジア認識や思想形成を探索のテクストとして位置」づけることに對して違和感を覚えるからではない。物語内容のレベルでも物語言説のレベルでも、テクストそのものがほとんど読まれているいない、という異様な事態にあらためて直面し、危機感を覚えたからである。

本稿の目的は、金子光晴の南洋もののテクストが生成する一九四〇年代の南洋文学を浮かび上がらせることであるが、そのためにはまず、『マレー蘭印紀行』を読み解くところから出発しなければならない。同じく一九四〇年前後に発表された金子光晴の詩集『鮫』（人民社、一九三七・八）やエッセイ類、あるいは戦後の著作であるが大半がその当時に書かれたとされる『女たちへのエレジー』（創元社、一九四九・五）など、『マレー蘭印紀行』以外の南洋ものについても視野に入れて論じていく必要があるのはもちろんだが、一足飛びにそこに踏み入ることについては、現在の研究状況が許さないからであ

る。たとえば『マレー蘭印紀行』を『鮫』の散文版（加茂弘郎『マレー蘭印紀行』論「こがね蟲」一九八八）であるとする評価は、概説的には成立するかもしれないが、テキストの外側をイデオロギー的側面から説明したものになつて²いると言わざるを得ない。『マレー蘭印紀行』と『鮫』だけではなく『女たちへのエレジー』も一緒にみるべきであるとする前掲『金子光晴の詩法の変遷』における主張も、『マレー蘭印紀行』や『鮫』を『女たちへのエレジー』の側から読みなおし、戦前から戦後にかけての断絶と連続性において三作品を位置づけてこそ生かされるものと思われる。

繰り返すが、金子光晴の南洋文学に関する本格的な研究は皆無である。その要因は、『マレー蘭印紀行』の本文を読んでみせた人がほとんどいないことにある。

統合的な紀行とその主体

『マレー蘭印紀行』の特徴の第一は、その書き出しにある。目次のタイトルどおり、「センブロン河」の描写から始まるのだが、そこはすでに現地であり、無名の奥

地である。「紀行」とは旅の記録であるはずなのに、いつ、どこで、どのような状況の中で、どのような目的の旅をしているのかが、にわかには判じ難いような構成になっている。たいていの近代日本の海外紀行文の冒頭には、旅という非日常的な営為がはじまるきっかけが身辺雑記の延長のような形で語られ、日付とともに固有地名が記される。その地名も、旅の最終目的地よりも前に立ち寄った玄関口たる港、途上の港であることが多い。日本の内地、つまり国内の移動から筆が起こされることも少なくないのは、日常空間の外に出たときが旅の始まりであるという認識があったからだろうし、海外への移動手段といえば、ほとんど船であったことも関係するだろう。その点では、夏目漱石『満韓とところどころ』（一九〇九）から谷崎潤一郎『蘇州紀行』（一九一九）、佐藤春夫『南方紀行』（一九二二）、芥川龍之介『支那遊記』（一九二五）、横光利一『欧州紀行』（一九三七）に至るまでどの紀行をみても同様である。ほとんど唯一の例外が、おそらくは、「小説」から始まる紀行文集である中河與一『熱帯紀行』（一九三四）であろう³。

本文を具体的にみていこう。「マレー蘭印紀行」⁽¹⁾は、「川は、森林の脚をくぐって流れる。……泥と、水底で朽ちた木の葉の灰汁をふくんで粘土色にふくらんだ水が、気のつかぬくらいしずかにごいっている。／ニツパ―水生の椰子―の葉を枯らして屋根に葺いたカンポン（部落）が、その水の上にたくさんな杭を涵して、ひよろついている。」（「センブロン河」と、いきなり現地の「川」と水上家屋の描写から始まる。その場所は、直接日本からの船が乗りつけることのできない内陸部である。「センブロン河」は、同じ英領マレーの中でも、バトバハ川やシンガポール川などに比べて無名であった。⁽²⁾「ニツパ」と「カンポン」が表象するマレー語空間は、さらに細分化、焦点化されて無名の固有名によって位置が特定されていくのだが、「バレラハ」「ジョラ」「トンカン・ペチャ」「ビルン」など、現代よりも遙かに南洋地域への関心が高かった当時の日本の一般読者にとっても、「シンガポール」や「コーランブル」などは異なり、未知なる空間であったと思われる。⁽³⁾

「センブロン河」の初出雑誌をみると、「小説」欄に掲

載されている。⁽⁴⁾その点、「熱帯紀行」と同じである。「小説」としての「センブロン河」が『マレー蘭印紀行』に収録されるとき、ほぼ同内容のまま表現を詩的に研磨する方向で改稿された。従来の研究では、初出との異同を最初に検証した前掲加茂論文に基づいて、検閲に配慮したという結論を踏襲するのが習わしになっている。しかしそれだけでは、テキストのイデオロギー的側面を強調することになっても、レトリックの重要性については眼をふさぐ結果になりかねない。「センブロン河」の改稿は、紀行の主体としての文法上の主語を極力明示せず、「川」を擬人的に主体化する方向でなされている。『マレー蘭印紀行』におけるこの場面の主人公はあくまで「川」なのであり、形式および内容の双方からその「川」が表現されているのである。

その後も主体の表象は、転調を繰り返す。紀行文らしからぬ移動主体の後景化は冒頭で幕をひき、次の「ねこどりの眼」以降のマレー半島の紀行では、はっきり「私」が前景化されていく。紀行の主体として立ちあがった「私」は、「爪哇」の章で同伴者「M」をともな

う旅人となり、やがてその「M」には台詞が与えられ、「私」と「M」の会話も記され、紀行の主体は「私たち」として明示される。その後、最後から二番目にあたる「珊瑚島」においてふたたび主語が消え、主語を用いずに文章を組み立てることのできる日本語の特性を最大限に活かした文体が現われる。

つまり、「マレー蘭印」の「マレー」部分においては「私」のひとり旅であったが、「蘭印」たる「爪哇」で「M」と合流。その後あたりは分かれて「珊瑚島」には「私」ひとりで赴いたことだろうか。⁹⁾この「珊瑚島」が占める特異な位置については後述するが、最後の「スマトラ島」は、非常にわかりやすい報道文体で、マレーとジャワとスマトラの相違点が整理されており、前半のようなレトリカルな文学的表現をとっていない。

以上のように、『マレー蘭印紀行』における紀行の主体表現は明瞭であり、全体を統合する語り手の存在がみてとれる。したがって、先行論における「マレー蘭印紀行」の記述は旅程の時間順ではなく、往路と復路を記載した内容が混在して、「紀行」として統合性に欠けた、

独特のものである。ほかの作品では多く一人称を登場させる金子であるが、『マレー蘭印紀行』では「私」という主体を登場させるのを差し控えている。同時代つまり一九三〇年に出された東南アジア関係の紀行文に比べても、これは際立った特徴なのである。¹⁰⁾のような考察には根本的かつ致命的な誤認がある。

次に、節と節、章と章の関連性から「紀行」の「統合性」について述べたい。「センプロン河」で明示された「雨期満水」の「十一月」は、次章「バトパハ」の冒頭「貨幣と時計」において示された「十一月と十二月の頃おい」へとつながり、同じ雨期における移動であることがわかる。同じく冒頭の「センプロン河」で説明だけされている「猿喰わず」は、「雷気」の節で実際の姿を見せて、舟が上流へと移動していることが伝えられている。また、「ねこどりの眼」という節の本文で「ねこどりは、鎖につながれた「木菟」として登場するが、その呼称は、その次の節である「雷気」における「大蒼鷺」の「凝視」が「猫属をおもわせるもの」だという表現と呼応する。また、末尾には「ねこどりの眼」が比喩

表現として現われ、「南方の天然は、なべて、ねこどりの眼のごとくまたたきをしない。そして、その眼は、ひろがって、どこまでも、圧迫してくる。人を深淵に追い込んでくる」と述べられるが、この「またたきをしない」眼は、同じく次節の「雷気」において、「私」が対面する「カンポンの土人苦力のなかからえられた美しい女」の「傍若無人な眼つき」とつながっている。この女の「眼」に貫かれて「私」は「獄舎にいる」と認識するのだが、この「獄舎」の認識は、すでに「雷気」の冒頭で示唆されており、さらに遡って鎖につながれた「木菟」の姿にまで行き着く。「雷気」の次の節は「夜」であるが、「雷気」の前半の密林の描写において、「榕樹の楼閣のした」を「夜のように陰暗」と表現し、「夜」のイメージをそれとなく喚起する伏線になっている。また、「雷気」の後半で実際に「雷の轟」をきく場面は、「夜なかから夜あけへ」である。

こうしていよいよ節としての「夜」に至るが、そこでは夜行性のいきものたちの「眼」が夜の密生林を走る様子から語り始められる。夜に大声をあげる蛙は「雷蛙」

と称される。「夜」は、「ねこどりの眼」のイメージも「雷気」のイメージもひきうけているのである。さらに「團主のために富の乳汁を醸すゴムの木」というくぐりだりは、次節「開墾」の冒頭「眼をとじると、くぐりぬけてきた森林の、ゴムの木のきりつけ面から茶碗に、一滴一滴したたる乳のまぼろしが闇の中にすつかりみえるようだ。それは、いたずらにあげがたまでこぼれつづけて。／馬来の乳房の、ジヨホールは、滋乳をふくませる乳くびにあたるが、くわえているのはよその狡童である。」へとつながり、比喩が連鎖している。また「開墾」では、「梟」がないており、「ねこどり」↓「木菟」↓「猫属」↓「ねこどり」↓「梟」と、言い換えによるイメージ連鎖が節をまたいで続いている。

こうしてみると、一見、因果関係や物語的連続性があり感じられない断章が並んでいるかのように続く節や章が、実は互いに呼応する単語や表現によって相補的、交響的な関係にあり、意図的な言葉の配置が織りなすイメージの連鎖が、全体をひとつのまとまりのあるものにしていくことがわかる。^①

「鮫」と『マレー蘭印紀行』の方法的類似

「散文詩」としても物語としても、読むこと自体が放棄されてきたかのような『マレー蘭印紀行』であるが、『マレー蘭印紀行』の思想的理解を助ける資料として用いられてきたのが、同じく南洋を舞台にした「鮫」(『文藝』一九三五・一〇)である。「抵抗詩」の代表とされてきたが、やはり丁寧に読まれることはほとんどなかった。^(註)

「鮫」を含む詩集『鮫』(人民社、一九三七)についてこれまで指摘されてきたのは、戦争、帝国主義、植民地主義への抵抗精神である。『マレー蘭印紀行』には、「鮫」に見出された反戦、あるいは反帝国主義、反植民地主義という評価軸を通して捉えられてきた受容史がある。ここでは両者の関係性をあらためて検証するために、「鮫」の本文について、手短かにみておきたい。

六部まである二四〇行の長編詩「鮫」の冒頭では、「海のうはつつらで鮫が、／ごろりごろりと轉つてゐる。」と、妙に軽いが妙に存在感のある「鮫」が日本とは直

接縁のない「海」とともに提示される。「鮫」は、第一部全体で、「腹のなかには、食みでる程人間がつまつてゐる」没義道(「もぎ道」)な「奴たち」として表象される。これは、上田敏の訳詩集『海潮音』(一九〇五)所収の「大飢餓」(ルコント・ドゥ・リイル)における「饑さめ」表象を受け継ぐものであろう。第二部からはアレゴリカルに転調し、にわかには寓意性を帯び始める。「奴ら」と呼ばれる「軍艦」と第一部で「奴たち」と呼ばれた「鮫」が同じく「不消化な人間の死骸で満腹」な腹を抱える存在であることが示され、「軍艦」が「鮫」の隠喩であることがわかる。実はこの「軍艦」のイメージは、第一部後半の「重砲のように威大で、底意地悪くて」という直喩によつてすでに示唆されていた。また第二部で「鮫の奴」が「金持の西洋人のやうに」という直喩で表象されるとき、「鮫」が象徴するものにはつきり「西洋人」のイメージが付与され、同じ第二部の冒頭で「ヴスコ・ダ・ガマ」「ヤン・ピーターソン・クーン」「サー・スタンフォード・ラッフルス」という固有名がいずれも「西洋人」のものであったことがあらためて印

象づけられる。この三人もまた「奴ら」と呼ばれ、その「奴らの艦隊」とあることから、隠喩としての「軍艦」を担う担い手の具体例であったことがわかる。そして、「吾等は、基督教徒と香料を求めてここに至る。」という一文が、「ヴスコ・ダ・ガマの印度上陸の言葉」として紹介され、さらにそれが「吾等は、奴隸と掠奪品を求めてここに至る。」という一文との換言可能性が示される。とき、読む者は立ち止って解釈することになる。

つまり、キリスト教会から資金援助をうけて海を渡る冒険家たちが道筋をつくる布教活動は、近代の医療や科学技術による援助を餌にした先住民の「奴隸」化であり、宣教とともにおこなう資源の開発は、先住民の生活に癒しと貨幣経済を持ち込み、協力者に対しては物質的に豊かにしながらそれより遙かに自分たちを豊かにすることを最終目的とした実質的な「掠奪」行為である。「奴隸」化と「掠奪」行為を推進するのが近代科学と軍国主義に基づく暴力であり、「軍艦」なのである。第二部では、第一部で姿を隠していた「俺」が、「奴ら」に対抗する主体として現われる。第三部では

「AUTO」(自動車)、第四部では「EMDEN」(港湾都市)が、「鯨」の背景に「てかてかし」た機械と海の帝国をイメージさせるドイツ語をちらつかせる。これらを解釈する際に重要になるのは、軍国主義、帝国主義、植民地主義といったイデオロギーとの対立を焦点化して抽象化してうけとめることではなく、帝国の叡智と植民地システムのしたたかさの根源とそれを支える構造を表象している点を読み落とさないことであろう。

「抵抗詩」というひとり歩きしているレットルについても、テクストに即して理解しておく必要がある。受動的な客体であった「俺」は、第三部ではじめて「奴らにぶつかっていい」く。「奴ら」は「壁」であり、「世間」という要塞である。「友情」「平和」「社会愛」「縦陣」「法律」「輿論」「人間価値」が標榜される場所でもあり、お伽話の中の悪者のようにあからさまな悪人顔を見出すことはできない厄介さを抱えている。「うはつら」で「ごろりごろり」のイメージと呼応する「浮流水雷」としての「鯨」が待ち構えているところにおつかっていい。第四部で「俺」には「女」と「子供」がいることが

明かされ、第五部で「俺たち」と複数化するが、第六部ではすでに「死骸の死骸」と呼ばれる。それでも「放浪をつづける」「俺」の腕には「女」がまきつき、首には「子供」が縋っている。「俺は、どこ迄も、まともから奴らにぶつかるとよりしかたがない」。ぶつかるたびに「死骸」となり、「死骸の死骸」となつてもぶつかり、死者の記憶を宿した虚構の身体・精神の・魂の抵抗が示されて終わる。

ここまでごく簡単にみてきたが、「鮫」においても『マレー蘭印紀行』においても同様に、冒頭で一人称が姿を潜めている。そして、まもなく明示された一人称がやがて妻子を含めた一人称複数の主体となっている。また「鮫」は六部、『マレー蘭印紀行』は八章（十九節）に分かれているが、どちらのテクストにおいても、よく読みさえすれば、個々の節や章の関連性やイメージの連鎖、随所に仕掛けられた伏線を（ここままで指摘した箇所以外にも）見出すことができる。思想的相同性の指摘にとどまるこれまでの外在的な理解は、詳しい内容を吟味する機会を奪うとともに、構造上の相同性を見えなく

してきたのかもしれない。そうだとするならば、その思想についての理解も怪しいものである。

「雷電」とその行方——マレーの「支那人」表象——

『マレー蘭印紀行』に登場するのは、マレー人・ジャワ人・スマトラ人・中国人・インド人・日本人・琉球人・オランダ人・スラーニー（混血児）・ユダヤ人・ベングアル人・アラビヤ人・安南人・海南人・ヒンズー人（キリン族）・タイ人などである。イギリスは、英領マレーを通して表象されるが、イギリス人は登場しない。それに対して、中国人は苦力や南洋華僑、日本人は現地邦人を通して表象され、マレー人は、先住民としての「土人」「土民」あるいは「船夫」「サルタン」などの名で表象される。『マレー蘭印紀行』における「マレー」と「蘭印」の描写配分をみると、圧倒的に「マレー」の比率が大きい。「マレー」は、マレーの自然とマレー人だけでは表象できない空間としても表象されるのだが、そのようには読まれてこなかった。

『マレー蘭印紀行』が刊行されたとき、読売新聞の書

評(棟田博「美しい紀行類」一九四二年二月二七日、朝刊)では、「大変に真面目で、克明に、同胞の生活(特に農民諸君の開拓ぶり)を紹介する。廣く讀まれたい本と思ふ。異風俗、習慣等に眼を惹かれずに、一生懸命に同胞の姿を求めて正直に書いてあるのが好ましい。」と「同胞の生活」に関する記述にしか関心が寄せられなかった。⁽³⁾なるほど、ゴム園や鉄山の南洋開拓移民、琉球漁民、伝道牧師や娘子軍(からゆきさん)など、現地邦人は細分化されて描き分けられているのだが、主に彼ら彼女らとの関係において表象される「支那人」もまた細分化されている。四十年近く経って、たとえば奥本大三郎は、「螢の樹」(『すばる』一九八三・八)で、「熱地の旅をつづけていても、意気軒昂だったという彼の目が、南方の自然と人、すなわちマレー系の人種と華僑、そして在留日本人を公平にじつと見ていたことは、なによりも『マレー蘭印紀行』一卷が証明している」と称賛しているが、観察眼の「公平」さが直接表現された箇所があるわけではない。見出されるのは、対等に生きることが絶対的に困難な状況を追認できずにラディカルな夢想に

耽る「私」に潜在する水平的思考や平衡感覚への欲望である。また語り手は、全体を通して「本国の支那人」と南洋の「支那人」(華僑)とを分けて考えているだけではなく、南洋華僑も大別し、マレーの「支那人」とジャワの「支那人」とをはっきり区別している(「スマトラ島」)。

ここでは、第一章「センプロン河」において、とりわけ「雷気」「夜」「開墾」の表現が如何にしてマレーの「支那人」のイメージを定着させているのかを検証し、そこにそつとさしはさまれた「私」の「夢」を考察してみたい。

まず、「雷気」を胎んだ曇鬱なくもり日」が示され、「雷気」は、次のような「雷電」の気配を導く。

老いさらばえた大樹ばかりがおいかぶさった領域を過ぎると、眼界はにわかにはひらけて、あざやかな緑樹の層が、川づらへ重なりかかっていた。一塊り、一塊りのしげみは黄銅色のかたまりになって、かさなりあう銅鑼かともみえ、くもりびのなかに、

うすにぶり金色を遊離させているのであった。そのなかへ、いまに雷電がとびこんできて、放電がパチパチ始まるかとおもわれた。
〔電気〕

「あざやかな緑樹の層」は「黄銅色のかたまり」から「かさなりあう銅鑼」が連想され、「うすにぶり金色」が放たれたところに「雷電」が感得される。「雷電」は、南洋の自然のつくりだすものとして幻視される。さらに、「私は、その蟒の子供が、米粉湯の井のなかにしずんでいるありさまを想像してみたが、それは、そんなに嫌悪を俱う感情ではなかった。そして、支那人とその卵の内部を貫いて、つよい雷電の蠢くのを感じた」という場面では、「雷電」の蠢きの気配が「支那人とその卵の内部」を、局所的に貫くイメージが語られる。その場には「馬來人」や「生霊」、「私」もいるのだが、「支那人」だけが、瞬りかけの「卵」（蜥蜴とにしき蛇の卵である）とともに焦点化されている。ここでの「支那人」は、「雷電」に選ばれたのである。「私」は選ばれなかったのであり、「馬來人」や「生霊」は、「雷電」をつくり

だす南洋の自然の側に属するのだろう。

「森林のはてもしらぬ沈黙」「森林の冷氣」「森林の寂寥」の中で「雷の轟」をきく「私」は、現地の日本人を「森林のなかに忘れられた人達」「あの人達」と呼び、けっして同胞とは呼ばない。それに対する「私」の自己認識は、「私のような旅の者」であり、移民と旅人とを分けていたこともわかる。

「夜なかから夜明けへ、雷の轟をき、ながら、私は、南洋の森や、川や、生物を乗せて、そのすべてのものの肢体をつらぬいている信仰のようなものが、怖ろしい勢で、どこかへうごいているのを感じた。それは眠っているものも、目をさましているものも、一緒に運んでいってしまう——大きな廻り舞台のようなものである。」（「雷気」とあるように、「私」の耳を媒介して「雷」は、南洋の自然界全体の「肢体」を動かす「信仰のようなもの」の存在を示唆する。「ねこどりの眼」の末尾では、「昼の世界」が見せている「明るくて」「軽くて」「色鮮やか」な南洋が「嘘」であるとされ、「夜」の冒頭に描かれた「夜の密生林」の「野蛮」とは対比的である。見

えていない南洋の眞実は、見えている南洋の「嘘」を浮き彫りにし、獸たちが跋扈する夜の自然界は、「一足ずつ割り込んでゆく私自身に、本能的な、血みどろな快樂をさえおぼえる」。

その自然界に属しているのが「カンポンの土人苦力」である。その中から旅人のために「えらばれた美しい女」も、その夫と思われる「鈍^{バツ}を腰にさして」こちらを見据える「馬來苦力」も、まもなく「森林のもの」として放たれ、「安堵」とともに「悲し」みもたらされる。しかし悲歎にくれるのは、自然界の外部にいる人間の都合による所業にすぎない。自然界では、「雷電」や「信仰のようなもの」が世界をつらぬき大きな秩序を形成し、生殺与奪を司っているのである。

夜の森に「本能的な、血みどろな快樂」をおぼえる「私」は、一方的に見る者（支配する者）と一方的に見られる者（支配される者）の関係性（とその反転）に傷つき、ある種のうしろめたさとともに、悲しき熱帯を想う。テクストでは、けっして感傷的にならないよう表現が抑制されているが、注意深く読むと、激しい感情が

漲っているのがわかる。

したがって、「森の野蠻は征服され、静穩な人たちのくらしがはじまった。野蠻にむかつて、いみじくも備えた心身の鍛錬も、飛躍も不必要となり、そのかわりに規律的な事務だけが残った。」（「夜」という一文も、前後の文脈より「森の野蠻」が「土匪」化した「支那人」を指すのは明らかであり、「征服」の主体は護謨園を経営する日本人である。匪賊化の原因は「旦那」にあり、「土人苦力」はそれに協力させられたのである。また、続く「そして、一匹一匹ずつ、ねらい撃ちされて、川底の鰐はいなくなつた。」（「夜」という一文における「鰐」も、「土匪」化した「支那人」と並列されているところから「鰐」に「支那人」を重ねて読む読み方が誘導される。単純に事実を伝える記述に見える一文における置き換え（比喻表現）を読み解きさえすれば、「森の野蠻」「支那人」「鰐」が肯定されていることは明瞭である。

「森の野蠻」を肯定する「私」は、次のような語りの中で、激しい内面（「私の気持」）が表現されることになる。

森のあらたな整頓と、静肅のなかには、失われたもの、いなくなってしまうものをいたむころから強く漲っていた。同時に、それは人のこのころから自己と放恣とが亡びてしまった取り返せぬ淋しさを語っていた。みだされぬ私の気持は、懐中電燈がうつし出す黄ろく濁った水のなかに、扁平な、カリカチュアじみた鰐のかたちが、幻にでもあらわれてくれぬものかと、秘かに待ちうけているもののごとくであった。夜のくらやみには、森のいきものの類、歎きが抱きあっているのを眺めてすぎるばかりであった。

〔夜〕

ここで「私」は「鰐」の「幻」を期待し、「森の野蠻」の復活を秘かに待ちわびている。それは、土匪化した「森の野蠻」としての「支那人」の到来への祈りである。ここで「私」は歎き、「挽歌」を唄う。しかし、「センプロン河」の冒頭には、「水は、歎いてもいない。挽歌を唄ってもいない。それは、ふかい森のおごそかなゆるぎなき秩序でながれうごいているのだ。」とあった。主

(あるじ)たる自然は「歎」かない。死を悼む「挽歌」も唄わないのだ。

感傷を排した自然描写から書きはじめているのは、『方丈記』の時代から自然主義を経て現代歌謡曲に至るまで綿々と続いてきた、ゆく河の流れに人生を重ね心情を投影させて川を眺める心の習慣を切断し、そのように蓄積されてきた日本語の叙法の外部を設定するためであり、読者共同体に根付いた自然に対する伝統的な感性では捉えきれない空間として南洋を提示したからだろう。

その試みは、自然から風景をとり出して内面を仮託し表現するような小説作法からは遠ざかることになり、自然と人間を対立関係においてみるような自然観に近づけることになる。しかし、ここで前提になっているのは、自然を人間の対立物におくことではなく、人間を自然の対立物におくことである。その前提のもとに、人間も「森のいきもの」も、歎き唄うのである。人間中心主義(自然との共生といった考え方もここに含まれるだろう)を相対化した上で、野生の思考が語られるのである。南

洋の自然界に「この世ならぬ悲調を帯びた明るみ」をみてとるのは、夜闇の野蠻が征服されつつあるのに昼の世界はいつまでも明るく見えてしまうからであり、そうした悲しき熱帯のイメージを感受しているからである。

「私」の内部には、自然主義的感性（と言い得るあらゆるもの）からはみ出したある激しい怒りが潜伏し、祈りの言葉が生れたが、その祈りが通じたのが次のような場面である。

——昨夜、センブロン河流域の個人ゴム経営者末藤氏一家がゴム園私宅に於て惨殺された。犯人は、支那人。目的は金銭らしい。

たまさか、私が居あわせて受けとったこのニュースは、センブロンの水のなかに、鰐の姿を待っていたことが、それほど浮世離れたのぞみではなかったように思い直され、いうことをはばかなければ、一種の充足感で、身内がときめいたのであった。

〔夜〕

「私」の物語としては、前半部のクライマックスになるはずの場面である。「ゴム園経営者末藤氏一家」が「惨殺」されたという「ニュース」が「充足感」をもたらしわけだが、それは「私」にとつては「のぞみ」であった。「私」が待っていたのは「鰐の姿」であるが、「鰐」とは、先に確認したように、土匪化した「支那人」のことでもあった。したがって、犯人は「支那人」であるという事実認定がされている。「末藤氏一家」の「惨殺」事件から導き出されるもの——「森の野蠻」が「秩序」を乱す文明人を殺すという図式——は、まさに「私」が秘かに願望していたことであつたのだ。

以上のことから、『マレー蘭印紀行』には、中国人への過激な共感とともに、日本の帝国主義に対する批判がみられる、とすることができると言える。しかし、そのときの中国人（「支那人」）とは、あくまでも、本国の中国人ではなく南洋華僑である。さらに、南洋華僑の中でもマレー奥地の南洋華僑であり、シンガポールで商売をしている華僑とも異なる「土匪」化した華人である。なぜ「土匪」化という限定がつくのか。それは、「馬來人苦力」

と同等であり、同等でありながら匪賊化するという点で馬来人とは異なる存在だからであろう。野蠻化した「支那人」は、「土人」化すると同時に「土匪」化するのであり、それは「土人」として抵抗の主体となることを意味する。金子光晴は、おそらくそこに可能性を見出したかったのではなからうか。

「開墾はすんだ。火で浄めた新しい土には、ゴムの苗木がうえられる。だが、人間が、犠牲をものともせず、おのれの富の無限をくらべようとした非望も、広大無辺な森のなかに一つ二つ、けちな砂利禿をつくったにすぎない。」（「開墾」）という「センブロン河」の章全体の末尾においても、「森の野蠻」の前では無力で小さな存在でしかない人間の営為を確認しており、金子光晴が見出した可能性がみてとれるのだが、そこでテキストは終わらない。

金子光晴のイデア

金子光晴が見出した可能性は、いわゆる文明化とは正反対のベクトルをもっている。それは、旅人の小さな体

験においては実現可能であり、「充足感」をもたらすものもあるが、読み進めていくと、大局においては無効であると認識されていたことがわかる。先にも少し触れたように、金子は、舞台を「スマトラ島」に移した末尾において、南洋華僑について次のような現状分析を示している。それは、前述した「マレー」における私的なロマン主義とはまったく異なるものである。

南洋各地に於ける支那人の経済的勢力は偉大なものである。

英領各地に於ては、支那人と土人とが、もはや、みわけがたいまになつて、奥地には獐悪な、危険きわまる支那人の出没するところもあるが、蘭領の支那人は、労働者の入国が許されないという関係上、土人より階級が上位にある。

特に、爪哇方面の支那人は、数百年來の移住者であつて、その蓄積した富の程度は、爪哇全土の経済を支配する力をもっている。彼らは、独特の商法と、貯蓄心とをもつて、ながい年月に土人をしぼり

つくした感がある。

本国の争乱をよそにして、南洋は、彼らにとつて、実に平和の楽天地なのである。海南島の人間と、福建省、広東省、広西省の間人がその大部分である。

スマトラに於ても、もはや、支那人の勢力は、根づよく喰入っている。

それは、あだかも、榕樹が、まず、他の大木のまに寄生して、そこから気根をおろし、栄養を吸い取って、ついに、親木をしめこらし、数町にわたって繁茂するありさまを髣髴している。

彼ら相互の職業組合や、同郷のものに対する協力の精神はおどろくべき鞏固なものであるが、同程度の排他心も強いのである。ながい年月と、風土習慣を異にしても猶、ぬくことのできない支那魂をもっている。

〔スマトラ島〕

人間中心主義的な世界観における客観的な記述になっているのがわかるだろう。そこでは「危険きわまる支那

人」が位置づけられ、経済的な成功者としてのジャワの「支那人」に対しての共感はない。

いわゆる植民地の問題は、政治的な範疇におさまるものではなく、政治的解決を考える際にもまずは政治経済的な範疇で考えなければならない。政治的独立以後の旧植民地の問題の中核を占めているのも、政治経済的な問題（そして文化的な問題）である。「南洋各地に於ける支那人の経済的勢力」は、ポストコロニアルと呼ばれるような状況下において継続されているのが二一世紀に至るまでの現実であり、旧宗主国による経済的関与の継続性の問題と同時に難題となっている。それはもちろん、（文脈はともあれ）植民地時代から見えていたことであつた。

ここからは、金子光晴が、南洋華僑の中でも現地化した華僑にのみ思いを寄せた理由についてあらためて考えてみたい。

「開墾」という観点からみれば、自然と野生は一方的に搾取・征服される対象である。それは苦力の立場にある者も同様である。「土人」の原義はその土地の先住民

である。⁽¹⁵⁾ 自然の中で「子守唄」を唄いながら暮してきた「土人」は、自然と対決して何らかの形で脱「土人」化を目指すような道など必ずしも必要ではなかった。しかし故郷を離れて「土人」^{ネイティブ}の住む場所を訪れた者たちの多くは、開墾者となる一方で、みずから「土人」化するとはなく、「土人」の自然に関する叡智を利用し、労働力を搾取して自然を開発し、経済的な効率を追求した。だが、自然・野生の側に立つ者にとつての「土人」化とは、ひとつの理想であり、その理想においては外来者が侵略者・支配者ではなく移民・植民⁽¹⁶⁾となるのである。そうした「私」の思いが、現地化した華僑をめぐるロマंचイズムとなつて現われたのである。革命への夢にも似たそうした理想を「野蛮」によつて実現した者が実在することを現地地知り、「土人」を征服して搾取の対象としたゴム園経営者に向けて心秘かに憎悪の念を抱き、自然と野生の側からの逆襲を夢見たのだろう。

「土匪」「匪賊」という言葉は、取り締まる側からみれば生活を脅かす暴力的な存在であるが、見方を変えれば、「土匪」化させた要因は経営者の側にある。起源を

探れば連鎖する暴力の主体は反転し得る。亡びゆく者たちへ寄せる浪漫的心性もあるのだろうが、そうした構造に気がついたときに、現実政治における無効性を自覚しながらも現在の勝者の立場からの一方的語りには加担しない語りに眼を向けたのだとしても、不思議なことではない。

それでは、何が金子にそうした構造に気付かせたのだろうか。もちろん現実観察が基盤にあるのだが、この時期特に金子に影響を与えたテクストとしていくつかの翻訳書の存在も先行論によつて指摘されてきた。それはたとえば、レーニンの『帝国主義論』、マルクスの『資本論』、ステイルネルの『自我経』である。南洋旅行中にこれらを再読、熟読したという「事実」を、本人を含めたいくつかの証言から推測できるのは確かである。証言からの推測ということでは、西條八十から借りたまま海外に持ち出したという萩原朔太郎の詩集『月に吠える』をそこに加えることもできるが、もしも証言などではなく『マレー蘭印紀行』の本文から推測するとしたら、プラトンの『ポリテア』（『国家』）も加えること

ができるのではないだろうか。というのも、「珊瑚島」の末尾に当時は一般的ではなかった「アイデア」という言葉が用いられているからである。

諸君。人人は、人間の生活のそとにあるこんな存在をなんと考えるか。

大汽船は、浅洲と、物産と交易のないこの島にきて、停泊しようとしな。小さな舟は、波が荒いで、よりつくことが減多にできない。人間生活や、意識になんのか、わりもないこんな島が、ひとりでは明けはなれてゆくことを、暮れてゆくことを。人類世界の現実から、はるかかなたにある島々を、人人は、^{アイデア}意想とよび、^{ユートピア}無何有郷となづけているのではあるまいか。

（「珊瑚島」）

前述したように、「珊瑚島」では紀行の主体が明示されない。引用した末尾の呼び掛け文体は、紀行の主体によるものというよりも、これまでみてきたようなテクスト全体を統合的に語る語り手（金子光晴の設定した語り手）によるものだと考えてよいだろう。「人類世界の現実から、はるかかなたにある島々」には、大小の船がまったく着かないわけではない。陸地として地球上に実在するし、未知の領域でもない。ただ、「物産と交易」がなく「人間生活や、意識になんのか、わりもない」島なのだ。物質的にも精神的にも必要とされない閉域は、存在自体が忘れられ、忘れられた島は、「生活」や「意識」を空白として表象する場所となる。その場所が「珊瑚島」であり、「アイデア」や「ユートピア」と呼ばれるのである。

「アイデア」*idea*は、プラトンの用語でありその哲学における重要概念である。ソクラテスとの対話という様式をとったプラトンの大著『ポリテイア』第七巻における「太陽」「線分」「洞窟」の比喩などによって説明されるが、中でも「洞窟の比喩」はよく知られている。ただし、プラトンの哲学を概説する際に「アイデア」を中心に据えて理解されるようになったのは戦後のことである。

納富信留によれば、戦前の日本におけるプラトンへの一般的関心の中心は「哲人統治論」であり、「真理」、

即ち「イデア」への視点は完全に欠落している」という。確かに、戦前にプラトンの著作の全体をカバーした唯一の全集である木村鷹太郎訳『プラトーン全集』（但し英訳からの重訳）の第二巻『理想国』縮刷版（富山房、一九一八）をみても、「イデア」はルビなしで「觀念」と訳されている。プラトンの名前自体は大正期のモダニズムと教養主義の流行の中で一般に広まっていく一方で、今では日本語に定着している「イデア」が広まることはなかった。すなわち「イデア」は、『マレー蘭印紀行』の時代においてはほとんど注目されなかったのである。また現代の日本では、『ポリテイア』の邦題も『国家』（藤沢令夫訳、上下巻、岩波文庫、一九七九）でほぼ統一されているが、明治以降の日本では、『共和国』『理想国』『国体』『国家』といった複数の標題で紹介されており、なかでも全集にも用いられている『理想国』は有力な訳語であった。ここで注意が必要なのは、日本語の「理想」は、明治初期に西周がプラトンの哲学を日本に紹介する際に、「イデア」を「觀念」（仏教用語に由来）と訳すとともに「理想」という造語によって説明し

たときに生まれているという事実である（森岡健二と納富信留の調査による）。

「ユートピア」utopia は、トマス・モアの造語であり、その著作『ユートピア』（二五一六）により日本にも導入された概念用語である。『ユートピア』は、明治の早い時期に翻訳されたが、荻原民吉訳『理想的国家』（一八九四）で utopia は「理想的国家」「理想島」と訳されている。プラトン『ポリテイア』の初訳は、それよりも後の一九〇六（明治三九）年のことであり、そのとき木村鷹太郎により標題が『理想国』と訳されたのである。つまり、プラトンの「イデア」を起源とする日本語の「理想」は、トマス・モアの『ユートピア』の翻訳において用いられ、その後、プラトンの『ポリテイア』の翻訳に用いられる一方で、しばしの間、「イデア」は忘却される、というねじれ現象が起こるのである。

『ポリテイア』が『理想国』と訳された背景について納富は、『ポリテイア』を「ユートピア思想」として理解する一九世紀イギリスの文脈があり、実現を度外視しつつ描かれた「理想郷」(utopia) という受け取り方に

由来する」と述べている。また、「理想的」(ideal)という語は、想像上のもので実現不可能という意味と、現実に目指すべき目標という意味との両義性を帯びており、日本での理解もその間で揺れていた」としている。英国や日本でプラトンとトマス・モアを同時代に受容したとき、テキストの外側で、『ポリテイア』の「ユートピア」化とも言うべき逆転現象が起こった可能性が示唆されているのだ。金子光晴の『マレー蘭印紀行』(一九四〇)の「珊瑚島」における「アイデア」と「ユートピア」は、こうした文脈の中で考える必要があるだろう。

金子がプラトンの「アイデア」を知った範囲を、仮に日本語文献に限定して考えると、「善のアイデア」を紹介した専門書である波多野精一『西洋哲学史要』(一九〇一)、やはりギリシヤ語に精通した研究者である久保勉の『プラトン 国家編』(岩波書店の「大思想文庫」シリーズ、一九三六)、あるいはプラトンをひきあいに加えてトマス・モア『ユートピア』を解説した「月報」を付した『世界大思想全集』(春秋社、一九二九)、すなわちカンパネッラ『太陽の都』・モリス『無何有郷通信

記』・ベーコン『ニュー・アトランティス』とともにモア『ユートピア』が収録されている第五十巻あたりが挙げられる。『ポリテイア』の本文も、とりわけ第二巻には、坪内逍遙が紹介した文芸教育論が収録され、第十巻にはいわゆる詩人追放論が展開されているので、なんらかの形で目にした可能性は充分にある。いずれにしても、さりげなく記された「アイデア」と「ユートピア」であるが、知らなければ書けなかった時代に書き記された単語であったのは間違いない。また、当時における教条主義的マルクス主義者ならびに国家主義者によるいささか癖のあるプラトン受容とは全く異質な場所で金子が受容していたことを示すのである。

さて、『マレー蘭印紀行』の「珊瑚島」は、現在の「小島」として描かれていた。島とは何か。「波打ち際」によって自らの陸地を定め、視覚的には水平線の内側にある空間である。閉ざされていて開かれている。開かれているが閉ざされている。「非人情の世界に見える」無人島であり、「夜のようにまっくら」な「美貌の島」であり、「それは、晴天下で、あやしくも人の目をいつ

わって咲いている」。島に「よりつく」のは「漁夫」(忘れられた存在)であり、しかし彼らでさえ停泊するのは「二時間」未満である。「あまり水の底が明るすぎるので鰐や、鮫がいない」この島に「永居をすると不安になるのである」。「人生にむかつてすこしの効用のない、大自らのなかの一部分のこうした現実はいったい、詩と名付くべきものか。夢と称ぶべきであるか」。地球上には人間たちの目に映じないこうした「現実」があるとしているのだが、ここで見えている「島」とは、まさしくプラトンの喩えた「洞窟」空間と通じるような、喩えられたイデアの詩的形象ではないだろうか。

金子光晴は、「イデア」に「意想」という漢字を当てはめている。理想でも夢想でもなく「意想」というあまり見慣れぬ言葉を選択した理由のひとつは、理性により把握された現実と、想像上の夢の世界のどちらにも帰属せず、どちらにも帰属すると認識していたからかもしれない。「ユートピア」に「無何有郷」(憂いのない場所)と古典の中にある言葉を当てたのも、現実から遠く離れた理想や夢というよりも、実在するが人間のいない場所

という設定にして想定可能で思考実験的な場所を印象づけるためであろうか。

『ポリテア』によれば、人間は「洞窟」という獄に囚われた「囚人」のような存在であり、生まれてこのかたそのような境遇にある。「洞窟」のなかでは一つの方向しか見ることができないよう手足と首をきつく縛られている。「洞窟」の奥の壁の上では「操り人形」による影絵芝居(ワヤン)のような世界が映し出されているが、人間はそこに映し出された「影」を真実だと考えている。その「影」をつくっている真相としてのイデアを目にしたとしても、人間は「影」を真実だと信じ込んでいるためイデアを真実と認めることができない。

われわれ人間は、真実を見ていると思って生活しているが、「洞窟」の中で「影」を見ているようなものであるというプラトンのイデア論は、『マレー蘭印紀行』における一貫した主張——われわれは南洋の真実を知らない。知らないということも知らない——にも応用されている。だからこそ、色鮮やかで明るい昼の世界が嘘の南洋で、夜に真実があるとされてきたのであり、だからこ

そ「珊瑚島」の直前の節は「蝙蝠」なのである。「私」と「かの女」が「いねむりをしながら」バタビヤの夜を歩くとき、どこを歩いても見かける「蝙蝠」は、「ワヤン・クリの幕」にその身を映す「影」として表象され、それはまた「車道の象徴。夜党の紋章。切抜画の切抜画、人間よりももっと、私に語ることの多い爪哇の民衆。」と置き換えられるが、それらはまさにイデア的世界における影である。

ここで構想されているのは、①われわれが現実だと思っている世界（プラトンの洞窟の中・南洋の昼の世界）、②われわれの眼にぼんやり見えている影像の世界（プラトンの洞窟の中の影・南洋の夜の世界）、③われわれが眼にする影像の中でちらつく影のような実相（プラトンの洞窟の中でかろうじて知覚されるかもしれない影と交錯する実相・夜のバタビヤにおける象徴としての蝙蝠）、④われわれの思惟によってしか知ることのできない真実の世界の喩（イデアの詩的形象・「その世界」としての珊瑚島）といった順で真実に近づくような舞台設定である。

「二人の支那人」によって殺された「蝙蝠」を目撃した「私」と「彼女」は、最終的に「あの蝙蝠は殺されたのではない。自殺したのだ」という風に納得する。これは第一義的には「爪哇の民衆」の「自殺」と理解されるであろうが、「影」の自殺とは、思惟によってしか知覚できない世界に対する可視化される世界からのアピールでもあるのだろう。当初は「蝙蝠」に襲われていたと思いついていた「彼女」であったが、襲われても当然だと思いついていたということでもある。思えば、『マレー蘭印紀行』を貫くのは、こうした南洋からの刺すような眼差しであった。南洋からの眼差しは沈黙の中にしかなく、感受するしかないもの、換言すれば、思惟によってしか知覚できないものとして描かれていた。

南洋において、昼の世界は「洞窟」の暗闇であり、夜の世界は「洞窟」の影である。夜の蝙蝠は影の中を飛び交う影のような実相であり、イデアとユートピアを形象化したのが「珊瑚島」であった。「珊瑚島」は、南洋の美しい島であるが、「治癒の場」（岡谷公二『島の精神誌』一九八一）などではなく、「陰影すら印すことのない

いあかるさばかりの世界」とあるように人間を不安にさせる異様な空間であり、異様な空間に感じられるからこそアイデアなのである。

プラトンは、『ポリテイア』において、「詩人」とはアイデアの影を描く者であり、「詩」とはアイデアからの距離でいえば「影」よりも遠い存在であるとしたが、金子光晴は、詩的形象においてアイデアにより近づこうとした。「珊瑚島」の直後に置かれた「スマトラ島」で示された現状分析は、「珊瑚島」との対比において説得力をもつことになり、また長編詩「鮫」との類似点を大きく乗り越える要素を備えることにもなるのである。

プラトンは、劇作家（詩人）から哲学者となり、古代ギリシヤの現実政治を観察して戯曲という様式（対話篇）を選んでテキストにしたが、金子光晴は、詩人として旅人となり、南洋の国際関係を観察して紀行文という様式を選んでテキストにしたのである。¹³⁾

注

(1) 金子光晴は、第一次西洋行（一九一九年二月～一九二

一年一月）の往路および復路と第二次西洋・南洋行（一九二八年九月～一九三二年五月）において南洋を体験している。まとまった形で南洋体験は、第二次西洋・南洋行の往路における六ヶ月の滞在（一九二九年六月～二月）と復路における四ヶ月の滞在（一九三二年一月～五月）のあわせて十ヶ月ほどである。なお、同行した森三千代は、往路においてこのときの南洋を先に発ち、復路において後から合流しているので、このときの南洋体験は光晴よりも約二ヶ月少ない。

(2) ただし加茂論文は、はじめて『マレー蘭印紀行』の身に切り込んだ、ほとんど唯一の論考である。私は、前掲拙稿で加茂論文の実証部分を引き継いだ検証もおこなったが、今回は、結果的に、本文の内容にも部分的に目を向けた加茂論文が示した方向性を発展させて、テキスト全体を読みとおす作業へと進めた格好になっている。

(3) 中河興一『熱帯紀行』については、拙稿「文学における『土人』——中河興一と村上龍——」（川村濤責任編集『戦後』という制度——戦後社会の「起源」を求めて——）（文学史をよみかえる 5）インパクト出版会、二〇〇二年所収）を参照のこと。

(4) ここでの本文引用は、あえて中公文庫版の『マレー蘭印紀行』を用いることにする。第一にそれは初版との間にはほとんど異同がみられないからである。また、もつと

も普及しているテキストを使い、シンプルにどこまで読めるのか、を提示したいからである。もちろん初版との校合はおこなっているが、仮名遣いなどは新字体に改め、テキストの特徴のひとつであるルビについても、論証すべきことと関連しない限りにおいては、極力省くことにした。なお「鮫」は、普及版がないので、初版を用いることとする。傍線部などはすべて引用者による。

(5)

バトバハやシンガポール、ペンゲランなどは、マレー半島の沿岸部に位置するが、センブロン河は内陸部にある。しばしば誤解されているが、『マレー蘭印紀行』の旅の範囲は、基本的に日本人が開拓した場所に限っており、半島を北上してタイとの国境付近にまで足をのばしたり、沖に出て多島海をめぐるなど、自由な移動がみられるわけではない。その点で、コンラッドやヴァン・デル・ポストなどの描く植民地の文学とは一線を画す。また、旅の仕方をみても、光晴が詩集を訳しているアルチュール・ランボーの伝記的事実——『ランボー全詩集』（青土社、一九九四）などによるとランボーは、パタヴィア（ジャカルタ）までの航海経験があり、またヨーロッパ人未踏のアピシニアの奥地に入った経験もある。晩年は交易に従事する商人になりきって亡くなっている——とはまったく異なる。金子光晴の旅程をたどるなら、『マレー蘭印紀行』の「マレー」については、欧州に行く際の往路でいちど訪れたのと同じ場所を復路で再訪し

ているようだ。金子の場合、「放浪」と言っても、ある程度は後先を考えた旅でもあり、本人は否定しているが書くために再訪した面もあったのではないだろうか（実際、旅先で書かれた作品が多いという）。金子自身、真の放浪というものに敏感であったからこそ、「かへらなことが最善だよ。」それは放浪の哲学。「ニツパ椰子の唄」という言葉を遺したのではないか。この有名な一節には、自身や自身をもちあげる向きに対する諧謔をこめていると解釈できる。

(6)

『大南洋地名辞典』第二巻「馬來及北西ボルネオ」（南洋経済研究所編、一九四二）をみても、「センブロン」の扱いはけっして大きくない。しかし、テキストにおいては大きな川をあらわす「河」と呼び、冒頭に据えて重要な位置を与えている。

(7)

鉄山のあったペンゲランは、シンガポールにも近く、それなりに知られていたと考えられる。

(8)

『マレー蘭印紀行』に取められた各文章の初出を、わかっている限り、目次順に記しておく（『人物書誌体系金子光晴』と加茂弘郎『マレー蘭印紀行』論』を参照しながら、独自に確認と補遺をおこない、作成中のものである）。なお本稿では、便宜上、章と節に分けられたものとみなして表記する。

センブロン河

センブロン河（『センブロン河』『NOUVELLE』

昭7・9)

ねごりの眼(「ねごりの眼」詩集 昭7・10、未見)
雷気

夜(「夜」詩作 昭11・5、未見)

開墾(「馬來ゴム園開墾」作品 昭9・1)

バトバハ

貨幣と時計(「馬來の感傷」セルバン 昭7・8)

カユ・アピアピ

霧のプアサ(「霧のプアサージョホールバトバハにて」

『新亜細亞』昭14・9)

鳶と鳥

虹(「馬來の苦力」『文藝春秋』昭9・7)

ベンゲラン(「南洋華僑の排日」『文藝春秋』昭12・10)

鉄(スリメタン)

(「鉄(一)」「歷程」昭11・10、「鉄(承前)」『歷程』昭

11・11)

コーランプールの一夜

新嘉坡

タンジョン・カトン

新世界(「シンガポールの裏町から—軍港街に集う諸

人種氣質」『文藝春秋』昭13・5)

爪哇

爪哇へ(「爪哇へ」『世代』昭11・6、未見)

蝙蝠(「蝙蝠」『文藝』昭14・9)

珊瑚島

スマトラ島(「スマトラ島」『改造』昭6・4)

跋

(9)

伝記的に語られている事実とは異なる。紀行の虚構性を示す箇所と言つてよいだろう。とりわけ「珊瑚島」については、森三千代が「猿島」(「新嘉坡の宿」一九四二)で書いた島と同じ島であると言われているが、そうだとすると、ふたりで見た同じ島をモデルにして、それぞれ別の島を書いたということになる。「マレー蘭印紀行」に即して考えるなら、マレーでは「私」ひとりであったのが、ジャワでは「M」とふたりということになる。そして、「珊瑚島」には誰が上陸したのかはわからないように書かれている。こうした設定上の事実関係も重要であろう。松本亮らによって伝記的に追求されてきた疑問—なぜマレーに関する文章が多くてジャワに関する文章が少ないのか—を解く鍵も、創作意識の次元で考えることができるように思われる。

(10)

金雪梅『金子光晴の詩法の変遷』(花書院、二〇一一・三)。そこには、「マレー蘭印紀行」には、専門家として南洋を視察し研究するまたは報道するまなざしは欠けており」ともある。「専門家」という意識はなかったであろうが、「専門家」を唸らせる「まなざし」はあつたと言える(拙稿「マレー蘭印紀行」論序説)を参照のこと)。なお、「混在」にしても、一人称をめぐる考察に

しても、論法や条件によつては限定的にはあるが成立し得る。先行論の結論を組み合わせた結果とも思われ、著者だけの責ではない。また、同書は九州大学に提出された博士論文であり、多くの点で問題点を含むものの、全体としては荒削りに金子光晴の全体像に迫った意欲作であろうことを付記しておく。

(11)

「珊瑚島」の直前の「蝙蝠」の章の末尾には、「父親と母親のようなものが、並んで立っているふたりの中身を通りすぎていった」とあるが、ここで仄めかされている「子」の存在も、章や節をまたいで連鎖するイメージとして表現されている。「ウキスキーの角壺を愛児のようにかくし抱いて」(「カユ・アピアピ」)から、「嬰兒を抱いた嬬」(同)、「衝立に紐でしばりつけられた小猿」(同)、「子供を抱いた母猿」(同)、「子供がいばりくさつたように」(「鳶と鳥」)、「四歳のとき日本へのこしてきたまゝ、足掛五年あわないう子供にめぐりあつた気がした」(同)、「私は、その鳥賊の子を挟んだまゝ、ひっくりかえした。子供に共通な、おどけた愛らしさにはほえみながら、私はそれを口に放りこんだ」(同)、「馬来人たちは子供のように店先に立つてながめくらすばっかり」(「虹」)、「胎児のような顔つきをした、灰白の鯨の子」(「ベンゲラン」)と、多くは直喩によつて「子」がもちだされている。「私」が自身の子供を思い出す場面でも、「鳥賊」を経由して間接的に表現されている。

(12)

なお、「センブロン河」五節「開墾」内の有機的つながりについては、前掲加茂論文に既に指摘がある。

田中清太郎『金子光晴の詩を読む』(国文社、一九八二)では、詩集『鯨』からいくつかの詩が論じられているが、「鯨」はとりあげられていない。「鯨」を「読解」したほとんど唯一の論者が野村喜和夫『金子光晴を読む』(未來社、二〇〇四)であろう。第四章では、まさしく長詩「鯨」を丁寧に「読解」することが試みられており、大変貴重である。「読解」されている箇所(残念ながら末尾まで届いた全文読解ではない)については特に異論もなく、本論での「鯨」の読み方と部分的に重なるところがあることをお断りしておく。

(13)

これまで紹介されたことのないもので、ほぼ全文を載せた。その他の同時代評としては、『日本学芸新聞』(一九四〇・一一・二五)の書評があるが、「支那人」について字数を費やしていることを読みとつてはいない点で同様である。なお、『マレー蘭印紀行』の戦後の受容史の特徴については、拙稿で触れ、また中村の前掲書においても紹介されているが、同時代評価については詳しく検討されてこなかった。

(14)

ここで、悲しき熱帯というイメージを用いるとき、『悲しき熱帯』(川田順造訳、中央公論社)という邦題で知られるレヴィ・ストロースの著書が想起される。同書は、一九三〇年代のブラジルでの旅の記録をまとめた紀

行文であり、『マレー蘭印紀行』に描かれたと思われる旅（一九三〇年前後）とほぼ同年代を紀行の対象としているが、刊行年は一九五五年である。なお、村上龍にも同タイトルの小説集がある。

(15) 注(3)に同じ。

(16) 植民地とは、支配者、侵略者と同義ではない。ここで想定されているのは、理想的な訪れ人（異人）としての植民（あるいは移民）であろう。ひとまず、植民地の起源に遡っておきたい。

植民地概念の源は、古代ギリシヤのアポイキア (apoikia) とローマのコロニア (colonia) に遡ることができ。どちらも「植民市」である。〈離郷〉を意味し政治的に独立したポリスであったアポイキアよりは、本国からの集団的な〈移住地〉(settlement) 及び〈開拓地〉(plantation) の意味をもコロニアが実態に即する形でヨーロッパ各地に派生し、イギリスには colony がドイツには Kolonie が定着したものと思われる。なお、「植民地」 「殖民地」という近代日本語は、colony からの翻訳である。また、イギリス領の「海峡植民地」には settlement が用いられた。

十六〜十七世紀以降、ヨーロッパは次々に非ヨーロッパ地域を征服して政治的支配や経済的収奪の対象としていくが、そうした属領 (dependency) ないしは領土 (territory) が植民地と呼ばれるようになる。新渡戸稲

造のもとで植民地学を学んだ矢内原忠雄は、それらのあり方を、実質的植民に対する形式的植民と呼んで区別した（『植民及植民政策』）。また目的の相違により、植民地は移住型と投資型とに大別されてきた。基本的には、外来者が先住民を支配下において移住した地域を植民地と呼ぶのだが、必ずしも支配／被支配という関係性にあったわけではないという立場から、絶対悪ではないという理解もあるが、見方を変えようと、移住型は征服型、投資型は搾取型となる。

今日の視点から省みるなら、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの大部分の地域は共通して植民地支配をうけた経験をもっており、ヨーロッパ近代国家はこれらの植民地を犠牲にして発展してきたといえる。現代世界における南北問題という地域間格差の問題は、植民地の形成史にその起源がある。様々な言語表象の主体であり続けてきたのも宗主国の側であり、客体化、無言化されてきた被植民地の立場からみると、植民地とは単なる移住地や投資先ではないのである。支配や侵略とは無縁の「植民」概念は、理想化された形でしか存在しないのかもしれない。

ヨーロッパ諸国とは諸条件が異なるが、日本もまた近代化の過程において植民地獲得競争に加わりみずから戦争に参戦し、実際に「植民地」を保有したことのある国家である。近代日本が開拓、領有、併合、統治、建国

したのは、北海道、沖縄（琉球）、小笠原、樺太（サハリン）、台湾、朝鮮半島、南洋群島、「関東州」（遼東半島）、「満洲」（中国東北部）などである。そこでは日本人や現地の人々が、日本語あるいは現地の言葉で文学活動をおこなった。しかし、それらの総称としての「植民地文学」が研究の対象となるのは、尾崎秀樹の『旧植民地文学の研究』が出版された一九七一年以降のことであり、今なお厳密な定義は共有されていない。そもそも、これらの地域、領域が日本の「植民地」であったと明確に認識されてきたわけではない。当時の法令に「植民地」という用語は使用されていないし（公文書には使用されている）、北海道は新開地、朝鮮半島は併合の手、南洋群島は委任統治領、「満洲国」は独立国であったのだ。そうした場所で展開された文学活動も「外地文学」「大陸文学」「開拓文学」「南進文学」「南方文学」などと呼ばれていた。それらを総合的に「植民地文学」という観点から捉える概論が川村湊によって書かれてはいるが、多くの当該研究は各論にとどまっているのが現状である。また、大部分が欧米の植民地であった東南アジアに対しては、アジアの植民地解放を大義名分とする「大東亜戦争」において日本の占領、軍政という形でおこなわれたが、同時期に相当数の文学者が徴用され現地で活動しているの、あわせて検討する必要がある。

なお本稿は、以上のような文脈と現状を踏まえて「植

民地文学」研究を視野に入れてはいるが、帰納的に「植民地文学」概念を用いることには慎重でありたいと考えている。

(17)

納富信留『プラトン 理想国の現在』慶応大学出版会、二〇一七、九一頁。

(18)

戦後における金子の言語選択からも、プラトンとの関係を類推することは可能である。たとえば、金子光晴は、「IDEA」（「非情」新潮社、一九五五）というタイトルの詩を発表している。また『詩人 金子光晴自伝』（平凡社、一九七三）第一部のタイトルは、「洞窟に生み落されて」である。金子の「イデア」や「洞窟」へのこうしたこだわりも、戦前に書かれた『マレー蘭印紀行』を通してはじめて理解されるのである。

（つちや・しのぶ 本学准教授）